

# 女性意識の視点から見た『儒林外史』

章 芳

**要約:**『儒林外史』は呉敬梓の女性意識を強く反映している。呉敬梓は心血を注いで数多くの個性ある女性を描き、女性問題に注目し、女性の生存状況をありのままに描写し、女性たちの受けた屈辱や苦痛に同情していた。また、彼は作品を通して、女性の自立意識の目覚めを評価し、女性を尊重すべきだと主張し、妾を囲うことに反対していた。

**キーワード:**『儒林外史』、女性、女性意識

『儒林外史』の登場人物は多種多様であり、儒教を勉強している文人だけでなく、女性人物像も多彩であった。様々な女性の姿は、呉敬梓の偏見にとらわれず、開放的な女性意識を鮮明に表している。

## 1 個性溢れる女性群像を描き出す

呉敬梓は強い女性意識を持っていた。その強い女性意識はまず作品に描き出した数多くの個性溢れ、容貌の異なる女性群像に表れている。『儒林外史』には八股才媛の魯小姐や詩賦に長ける沈瓊枝もいれば、何時か正妻の座に上り詰める夢を見る王夫人や役人の奥さんになる夢を見る聘娘などの役人好きもいる。そして、王三のような死も恐れぬ烈女、更に市井に生きる「三姑六婆」もいる。これらの女性像の中で、穏やかな人柄の王冕の母親と節約上手の趙新娘は特に素晴らしい母親像に描き出された。統計によると、『儒林外史』には100人もの女性が登場し、その中で氏名ある女性は47人にも上っている（下表）。彼女たちは「それぞれ性格が違うし、氣質が違う、容貌が違う、話すことなども違う」<sup>[1] p24</sup>、みんな例外なく容貌と個性が独特である。

『儒林外史』に登場する主な女性像及ぶ登場「回」

女性像	主な登場回	女性像	主な登場回
王冕の母親	1	范進の母親	3
范進の妻	3	何美之の妻	4
趙新娘	5、6	王氏	5
嚴貢生の妻	6	荀玫の母親	7

老嫗	9、11	魯小姐	10、11、13、14
魯小姐の侍女彩蘋	10、11	魯小姐の侍女双紅	10、11、13
匡超人の母親	16、17	匡超人の義理の姉	16、17
匡超人の義母、の妻	19、20	辛小姐	20
牛老婆	23、24	黄氏	24
鮑廷璽の母親	25、26、27、32	王太太	26、27、28、33
荷花、采蓮	26	沈大脚	26、27、29、30
錢麻子老婆	27	杜少卿の妻	31、33、34、41、44
姚老婆	33、41、42	老婦人、庄微君の妻	35
虞育徳の妻	36	軍妻、木耐の妻	38
老婦人	38、39	沈瓊枝	40、41、56
細姑娘、順姑娘	42	苗老婆	43
凌家の二人大脚婆娘	45	権売婆	47
王家の三女、その母親、義母	48	少婦	51
聘娘	53、54	虔婆	54

上の表に書かれた47名の女性以外に、周進の母親や蘧公孫の母親、権勿用の母親、楊裁縫の母親、虞育徳の母親、武書の母親、鄧質夫の母親、縉吉甫の妻、金次福の妻、祁太公の孫娘、余大のお叔母・叔母、成叔父の叔母、彭老二の令嬢、方老婆、王玉輝の長女など53人の女性も登場している。彼女たちは作品の中での活躍シーンこそそれほど多くはないが、全体的に見れば、呉敬梓が女性に大いに注目していることを表している。

『儒林外史』を全体的に見ると、女性たちの登場時間は間隔を空けている。第一回「楔子を語って大意を述べ、名士を借りて全文をしめくくる」の王冕の母が登場する時代は元朝の晩期で、最終回の第五十六回「神宗帝が詔書で諸賢を顕彰し、劉尚書が聖旨を奉じて祭る」に沈瓊枝が登場するのは明朝の万歴四十四年、その間隔はなんと二百五十年近くに及ぶのである。『儒林外史』に出てくる女性の身分も様々である。宮廷や官僚家庭出身など権勢のある上流社会の女性のほかに、貴族の令嬢から市井の商売婦人まで、現実社会に存在するありとあらゆる身分の女性が描かれている。

『儒林外史』に登場するすべての女性について、呉敬梓は場合によっては詳細に、場合によっては簡略になど、様々な工夫をして描いている。全編に現れるのは、才女や烈女、そして母親であり、彼らに対して多くの感情移入がなされている。特に魯小姐や沈瓊枝、王冕の母親、趙新婦等は作者が力を入れて描いた典型的な人物であると言えよう。

### (1) 特別な才能を持つ才女

『儒林外史』には才色兼備の二人の女性が登場している。一人は魯小姐である。官吏の家の令嬢であるにもかかわらず、八股科挙に夢中、男勝りの功名心を持つ才女である。名門の家学伝統もあって、五・六歳から『四書』と『五経』を読み、十一・十二歳から書物を講じ、文章も読め、王

守溪（明代の八股文の大家）の文章を丸暗記した。それだけではなく、「王、唐、瞿、蔡、薛（いずれも明代の八股文の大家）を始め、名だたる大家の文章やそのほかの模範八股文選集、各省の試験答案など、三千余篇も腹の中に暗記しており、自分で作った文章も理にかなない、よく練れていて、目を奪うほど見事であった」<sup>[2] p88</sup>（第十一回）魯小姐の特性は、彼女が八股文に夢中になっただけでなく、彼女が八股文以外の文学の様式を軽視して嘲笑する態度にも表われている。八股文以外のものを邪道と思っている彼女は読者に幾つかの深い印象を与えた。一つ目は閨房の設備であり、「朝の化粧台の傍らにも、ぬいとりされた美しい寝台の前にも本を一冊、股一冊と積み重ねていた」<sup>[3] p88</sup>（第十一回）。花盛りの令嬢は閨房を科挙のような戦場のように変えてしまったのである。二つ目は、「八股文で新郎を困らせた」ことであり、結婚の日に、彼女は「身修めてのち家ととのう」<sup>[4] p89</sup>（第十一回）という句を作って夫に対句を求めたが、夫が返答に窮したため失望し、自分の人生を憂えた。三つ目は、夫に失望して望みを息子に托したことである。息子が四歳の時に、『四書』などの書物を読ませた。彼女はかつての自分のお父さんのように、自分が叶えられなかった夢を自分の子供に托した。これは悲劇の繰り返しではなからうか？呉敬梓が生きた清の時代では、「多くの政治家は女性も教育を受けるべきだと主張している。この考えは実用主義に基づいている。女性たちは科挙試験を受ける息子を手助けしなければならないからだ。また道徳的な視点からもその必要があった。それは女性たちに次の世代を教育する責任があるからだ」<sup>[5] p17</sup>。要するに、魯小姐は科挙制度の被害者でありながら、社会世論の犠牲品でもある。更に悲しいことに、彼女は子供を「殺す」殺戮者でもある。呉敬梓が魯小姐の才能と勤勉ぶり、聡明さを気に入っていることは明らかだ。しかし、呉敬梓は彼女が自分の溢れんばかりの才能を生活に対する愛に移し、閨房で穏やかに本を読み、ロマンチックな恋を味わって欲しいと願っており、科挙の八股文に潰される対象にも、まして科挙で人を潰す共犯者にもなってほしくなかったのだ。

八股文に詳しい魯小姐と違って、沈瓊枝は才色兼備で、詩賦や絵が得意である。彼女は塾の教師の家庭の出身で、幼い頃から詩や本を多く読んで、才能に恵まれている。しかし彼女は学問を富や名誉を勝ち取る資本だと思っておらず、男性のように自立したいと思っている。沈瓊枝は「中国の古代文学に登場した女性像の中で抜きん出た美貌と智慧を兼有し、一挙手一投足に個人的魅力が溢れる」<sup>[6]</sup>。彼女は封建的な禁制や礼教に縛られず、広い視野と強い勇気を持ち、自分のすること全てに責任を持っていた。塩商人の宋為富が策略で彼女を妾にしようとしたが、彼女はそれを見事に見破った。金で物を言わせる宋為富に対し、彼女はびくともせず、「他のことはともかく、私の父が書いた婚約書を見せてくれれば、何も言わない」<sup>[7] p323</sup>（第四十回）と反論した。宋為富はそれを聞いて恥ずかしくなり、彼女を避けるようになった。後になって、彼女は宋氏の家にある限りの金や銀、真珠や首飾り等を計画的に巻き上げ、器用に変装して、女中にお金を渡して家から逃げ出した。このことから彼女は計略をめぐるすことと緻密に考えることにおいて並大

抵ではないことがわかる。「故郷の人々に笑われるのを恐れた」ので、彼女は実家に戻らず、南京に行って自立することを選んだ。役所の捕方が彼女を逮捕に来たが、彼女は冷静沈着に、そして堂々と応対した。自宅に帰ると、役人に止められたが、役人に対して、見識を持って戒めた。慣例として役人に「茶錢（茶代、要するに賄賂）」を渡すのを拒否し、弱者いじめでお金を取ろうとする役人の不正に勇気を持って一撃を与えた。県役所で知県の尋問に彼女も論理的かつ冗ぶらず諂わず正々堂々と返事した。「私は不才とは申せ、文墨の道も心得ております。どうして張耳の妻が外黄（河南省の県）の奴隷にかしづくことを承知できますでしょうか」<sup>[8] p332</sup>（第四十一回）。その応対は文人の気質を表していた。彼女は知県が出した題に落ち着いて答えたので、「父のもとに還り、別に婿を選べ」という判決を勝ち取った。この時代では女性が独立することは非常に困難なことなのだが、沈瓊枝は自分で自由を勝ち取ったので、女性の中の英雄だと言えよう。彼女は女性に強いられた精神的束縛を破り捨て、自由で平等な人格に強く憧れ、かつ追求した。彼女の行動は間違いなく新しい時代の到来を予言している。彼女こそ中国文学史に燦々と輝く個性的な女性といえよう。

## (2) 死んでも悔やまない烈女たち

明清時代にも程朱の理学は依然として人々の思想を支配していた。「天理を存し、人欲を滅す」、「餓死は小事、貞操は大事」という理学思想が氾濫するこの時代には烈女はあとを絶たなかった。武書の母親、中山王府の烈女、成爺叔母と王家の三女はみな『儒林外史』中の烈女だが、特に王家の三女は典型的である。父王玉輝は身を持って彼女を教育し、彼女を従順と礼儀を知る女性として育てる。夫の死後、彼女は生活のすべを失ってしまう。彼女は親思いで気が弱く、実家に戻るに忍びなかった。その理由は「父は貧乏な知識人で、多くの子供を養うことは不可能」だからであった。そしてそのまま嫁ぎ先にも留まらなかった。「夫の両親も年をとり、嫁として親孝行できないばかりか、負担をかけることになる」<sup>[9] p384</sup>（第四十八回）からだったからである。彼女は若かったが、「幼くして父兄に従い、嫁いでは夫に従い、夫を亡くしては子に従う」<sup>[10] p680</sup>ことしか考えられず、死を選ぶしかなかった。姑の制止も、母の号泣も、彼女の決意を変えられなかった。逆に「芳名を後世に残せ」と励ました父の言葉が、彼女の殉死の決意を固めた。彼女の殉死は社会を興奮させた。「多くの人に王氏の三女は節操が固いことを知らしめた。これは王氏の三女が死によって勝ち取った結果である。一人の若い女性を生き埋めにしたが、社会はそれを『名教に光彩を添えた』と評価した。礼教はその偽善的な口を大きく開けて、若い生命を呑み込んだのである。」<sup>[11] p931</sup>このような悲劇は、当事者の自己意思によってなされただけに、読む者に哀痛の念をもたらし、深く考えさせる。「王玉輝が節操の芳名を得るために娘を自殺に追い込んだのは、情や性の致すところではないか。娘は実家で常に頑固な説を聞いたため殉死を思うようになったと言えよう。」<sup>[12] p316</sup>王氏の三女を代表とする女性たちが受けた屈辱と苦痛は呉敬梓の心を強く打った。呉

敬梓は芸術的な筆使いで当時の女性たちの惨めな生活をありのままに再現し、社会全体にこれらの現象に関心を持ち、考えてほしいと呼びかけたのであり、一人の女性に対する同情を表したのではなかったのである。

### (3) 子供思いの母親たち

母親はいつの時代でも大きな話題であり、『儒林外史』も例外ではなく、24人の母親が登場し、全登場女性の24%を占めている。第一回の王冕の母親に続いて、范進の母親、趙新婦、匡超人の母親や鮑廷璽の母親など、みな母親特有の影響力で子の前途や自らの将来を謀っている。作者は王冕の母親についてはあまり描写していないが、彼女に対する賛美の意と尊敬の念を隠そうとはしていない。王冕の母親は大義に明るく、官吏や富者に媚びへつらわず、息子が官吏の道を遠ざけ、名利の汚れに触れないよう示唆した。彼女は言辞正しく、役人と権力に正々堂々と向き合った。平凡だが、高貴な魂を持ち、王冕に誠実な人になり、物事に固執せず、身の潔白を重んじ、世俗に流されないよう教示した。知県が家を訪ねた時には息子の行き先を教えず、息子の逃走を支持し、一人後に残った。自ら死に至るまで我が子に官吏にならず淡泊な生涯を送るように諭したのである。頭脳明晰で、物事を長い目で見ることができた。このような母親が子供に与える影響は大きい。王冕が後世に尊敬される人物になったのも母親のお陰であった。この田舎の老婆は高い見識を持って暗黒の社会に一つの明かりを灯したのだ。作者が彼女のことを小説の冒頭に記したのは、実は儒者や凡人を戒める意図があったと思われる。

母親なら誰もが子供を愛する。打算的な趙新婦も例外ではない。彼女は息子のために打算した。嚴監生の妾で、実家は権勢がなく、頼れるものがなく、自身も才能がないため、家族の中では相手にされなかった。こうした状況下で幼い子の将来のためには計略を用いるほかなく、息子が嚴監生の唯一の後継者という立場を利用して、正妻の座に就くと同時に息子の後継者としての地位を守り、最終的に息子の力で贅沢三昧の生活を満喫したのである。だが母親が息子のために謀をめぐらすのは許されてもよからう。この小説に描かれた母親たちは、性格や個性、気質などは異なるにも関わらず、同じ女性として、また同じ母親として子供を守る気持ちに変わりはない。作者は彼女たちの女性特有の暖かい愛情と繊細な心情を描写している。呉敬梓はこうした女性たちを叱責すべきではなく尊敬すべきだと、我々に教えているのではなかろうか。

## 2 女性問題に注目し、女性の生存現状を反映する

女性問題は古くから最も大きな問題であった。先進的思想の持ち主である呉敬梓は反逆の精神で社会の各階級、各身分の女性群像の描写を通じて、女性に対する関心と思考を表現した。文芸作品は社会生活を反映している。<sup>[13]</sup> 名門出身の呉敬梓は、自分の社会的地位と経済的地位を失っ

ていく過程で、社会モラルの低下によって女性たちが惨めな生活を送っている様を親身になって観察し、小説の中で描写した。家を南京に移した呉敬梓は多くの名士と知り合った。当時、清朝の正統思想に反抗した顧巖武や黄宗義、王夫之などの思想家や、資本主義萌芽期の個性解放や平等思想などが彼に影響を与え、呉敬梓に自我との闘いや、所属階級への反逆、新思想の光を点した。<sup>[14]</sup> かくて魯小姐、沈瓊枝、王氏の三女、王冕の母親、趙新婦等の様々な女性群が呉敬梓の創作視野に入った。彼女たちの才能、見識、生き方、遭遇、個性や度胸などは、明清時代の多くの女性たちの宿命の縮図であった。彼女たちの描写を通じて、『儒林外史』は当時の女性たちの生存状況を全面的かつ具体的に表現しており、私たちが当時の女性たちの生活、感情や思想意識、精神レベルなどを理解させる由来となっていると言えよう。

### 3 女性の屈辱に同情し、女性の苦痛を思いやる

一夫多妻の家族制度は無数の女性たちを悲惨な運命にさらした。正妻は地位があったが夫に冷遇され、捨てられる悲惨な運命をたどる可能性があった。妾は女中のような存在であり、多くは貧しい家庭の出身で、商品のように売買贈与の対象にされ、男性の性欲を満足させる道具にされた。妾制度は男権社会において女性の尊厳が無視される主な原因であり、こうした奇形的な家族関係は数えきれないほどの悲劇を招いた。男性は「妻が貞操を守るのは、子が特定の父親の種であることを保証するためであり、妻は夫の絶対的な権力に屈服しなければならないし、たとえ夫が妻を殴って死なせたとしても、それはただ主人として権力を使っただけである。」<sup>[15] p53</sup> 小説『金瓶梅』に描かれる妻と妾が夫の歡心を買うため互いに陥れ合う現象は、妾制度の分かりやすい注釈と言える。『儒林外史』では「娘が正式に嫁げば、『新娘』と呼ばれ、後に『奶奶』『太太』と呼ばれる。しかしもし妾として嫁げば、死ぬまで『新娘』と呼ばれる」<sup>[16] p13</sup> (第二回) と記している。要するに、妾は生涯にわたって身分が低いのである。妾を娶ることは『儒林外史』によく描いている。例えば第五回では嚴監生の妾の趙氏が正妻になるために計略をめぐらす。第二十二回では万雪斎が七番目の妾の病気を治すために医者をもてなす。第三十回では杜慎卿が江郡で十七歳の若い王氏娘を妾として娶る。だが正妻・妾に関わらず、彼女たちの運命は悲劇の影が濃い。匡超人と苦勞を共にした妻鄭氏は、死ぬまで両親に会うことができず、死んだあとも埋葬されない。季葦蕭は安慶の王典史の娘である妻を無視して、揚州の尤家から嫁を娶る。これらは、男性中心の社会で女性の運命が翻弄され、男性が女性を玩具と見なし、尊厳と生命を弄ぶ様を活写している。小説を通じて作家は悲惨な境遇にあった女性たちに深い同情を寄せているのである。

#### 4 女性の独立を賞賛し、人間性の覚醒を促す

男性は女性に生存の機会を与えることによって女性を支配する。更に悪辣な男性はそれを武器に女性を弄ぶ。『儒林外史』に描かれる女性の大多数はそのような運命にあり、彼女たちはただ黙々と我慢して従うだけである。ただ自尊心と独立精神を持つ沈瓊枝だけは呉敬梓に尊敬され、力を入れて描写された女性の一人である。彼女はほかの女性とは異なる個性を持ち、女性の独立意識の覚醒を代表している。彼女が大富豪の塩商に嫁ぐことを拒否したことについて、名士杜少卿は「塩商という奴はうんと金を持っていて、豪勢で、おおかたの士大夫たちでさえその前に出ると肝を潰してしまう。あなたのようなかわいい娘さんが土塊のごとく見下したとは、誠に敬服の至りです」<sup>[17] p330-331</sup>（見第四十一回）と高く賞賛した。彼女は「家」を出た後に実家に戻らなかったが、魯迅が「ノラが家出をしたら、墮落か帰るか、どちらかしかない」と予想したのに反して墮落しなかった。彼女は世間の雑音を気にせず、南京で自分の力で生きようと決心する。節操を大事にし、決然と看板を出して自作の扇子や詩を売って自立する。作者は二回半にわたって沈瓊枝という女性を描き、彼女の気骨や志向、勇気、自立精神に焦点を当て、小説のなかで一番輝く女性像に作り上げた。『儒林外史』において、自立心を持つ彼女の姿は夜空に稲妻が走るように輝きを放っている。家族制度とたたかった『西廂記』の崔鶯鶯と『牡丹亭』の杜麗娘と違って、沈瓊枝は閨房から社会へと戦場を広げ、女性の社会的地位の向上と人格の独立という課題に目を向けた。沈瓊枝の最高理想は自由恋愛や自由結婚にとどまらず、自立を目標とした。呉敬梓は沈瓊枝という女性像を通して個性の解放という自分の基本的な思想を表現している。作者は杜少卿という作中人物の口を借りて、沈瓊枝に対する称賛と敬服の気持ちを伝えているが、それは作者自身が女性の尊厳を認め、女性の解放と女性の独立を真剣に考えた証だと筆者は考えている。

#### 5 女性尊重を主張し、妾制度に反対する

社会においても、家庭においても、女性はずっと抑圧された地位に置かれていた。「女性は社会を構成する一員として、また男性の親しい感情の客観体としてあるべき人間としての本当の価値は長期間にわたり、善意的に損害され、破壊され、貶められた。」<sup>[18] p43-44</sup> 『儒林外史』を通して、呉敬梓が憧れたのは互い尊重し、平等で睦まじい夫婦関係であった。例えば杜少卿の妻に対する態度を見ると、妻と一緒に山登りしたとき、杜少卿は大酔したので、「ついに妻の手を携えて、庭園の門を出、片手に金杯を持ち、大笑しつつ清涼山の岡の上を一里あまり歩いた」、「その様子を見て、周囲の人々はまぶしくて仰ぎ見ていることができなかった」<sup>[19] p265</sup>（第三十三回）。男女関係がデリケートな伝統社会では、夫婦の親密な挙動は公衆の前に晒すことは到底許されなかったが、その大胆な振る舞いから見ても、杜少卿は世俗的な観念を超えている。だが彼は孤独ではな

い。「書中の第一人者」と呼ばれた虞博士も彼を「風流で上品、普通の人は到底及ばない」と賞賛している。杜少卿夫妻は互いに尊重し合い、理解し合っている。第三十四回では、杜少卿は朝廷に招聘されるが、病気を理由に断わる。笑って彼に訳を聞く妻に対して、彼はいたずらっぽく、「馬鹿だな、おまえは！こんなに遊ぶにぐあいの好い南京という場所において、しかも私が家において、春や秋には一緒に外出し、花よ酒よと暮らせるっていうのは、楽しいじゃないか！どうして私を京師へやりたいんだね？かりにおまえを連れていったとしても、京師は寒いし、おまえは体が弱いし、風が吹いてくりゃ、凍え死んでしまう、拙いじゃないか！やっぱり行かないほうが穏当だよ！」<sup>[20] p270</sup>と答えた。これほど親密な夫婦関係を保ち、妻を尊敬し、妻を守るには、日常的に深い情感を養っていたからである。作中の杜少卿と莊徵君は作者の理想的な人物で、作者の人格志向と美意識を代表している。彼らの夫婦関係もまた作者の理想的な家庭の雰囲気やそれに対する憧れを表している。呉敬梓は亡妻が存命中一緒に送った幸せな生活を『減字木蘭花』という詩にし、仲睦まじい夫婦関係を表現している。

閨中の人逝き 冷を取る中庭 往事を傷む。厨娘を買い得て 荀令の香を消尽す。愁来れば 鏡を覓め 凋悴して二毛両鬢に生ず。良縁を覓めんと欲するも、誰か江郎を喚びてひとたび 眠りを覚まさん<sup>[21] p54</sup>

かくて我々は『儒林外史』が多くの妻の姿を描いたのも理解できよう。杜少卿が作者自身の投影であることは学界ではもはや常識だが、小説の中での杜少卿と季葦蕭の対話から、呉敬梓の妾制度に対する態度がわかる。季葦蕭は酔払って杜少卿に聞く、「君は絶世の風流人なのに、なぜ若く美貌な側室を娶って、才子佳人、時に及んで行楽しないのか」と。杜少卿は答えた、「葦蕭兄！『いま老いて醜しといえども、もとより我その愛らしく麗しきを見るに及べり』という晏子が妻を愛した言葉をご存じでしょう。それに妾を置くことは天理を害なうこと甚だしいと思います。天下には限られた人しかいない。一人で幾人もの女を独占していたのでは、妻を持ってぬ人間が必ず現れる。私は朝廷のために法律を設けようと思います。人が四十で子が無い時、一妾を娶ることを許す。もしその妾が子を生まなければ、他に嫁がせる。こうすれば天下に妻の無い人間は少し減るでしょうし、精気を養う一助ともなりますよ」<sup>[22] p274</sup>（第三十四回）と。これはもっぱら女性を尊重しているとはばかりは言えないし、女性を生殖の道具と見る観念も含まれてはいるが、妾を置くことが常識の当時の社会から見れば、杜少卿の「糟糠の妻を捨てるべからず」という考えは、呉敬梓が世間の貪欲な男性に妾を娶る行為をやめるよう忠告する意味を込めていると言えよう。

『儒林外史』以前の明清時代の「章回体」小説にも多くの女性が登場しているが、それらの女性たちはいずれもあるいは『三国演義』のように、男性の「服」のごとき存在か、政略の道具か、



あるいは『水滸伝』の「四大尻軽女」のように梁山泊の英雄たちに対立したり、「母大虫」のように豪傑となったり、あるいは『西遊記』のように妖魔となって人を誘惑したり、人を害したりして男性の成功の邪魔をする存在として描かれた。『聊斎志異』では積極的に男性に接近し男性に尽くす女性を多く描いているが、作者の書生臭が出ており、はかない夢を表現しているにすぎない。『金瓶梅』は確かに女性を中心に描いているが、「金」・「瓶」・「梅」のいずれもが好色で、恥知らずで、本分を守らない悪女たちであり、彼らは本当の女性だとは言いがたい。それに対して『儒林外史』は女性の本当の姿を追い求めていると言える。作品に登場する女性たちは現実世界のごく普通の女性であり、生命の本質を有しており、作者は女性たちに得るべき地位と尊厳を与え、彼女たちを「人」として描写している。この点で女性を蔑視し、女性を男性の付属品として描いた従来の文学作品と決定的に違う。『儒林外史』は数多くの個性のある女性を描き、その悲惨な運命に同情し、さらに女性の自立意識を称賛し、明確に女性尊重を主張しているところに新しい歴史を切り開いた作品だと言えるであろう。

時代の制約と限界のもとで、作者は女性問題を解決する具体的な方法を示すことはできなかったが、女性問題の発展方向を明確に示し、希望の明かりを灯したことは評価できよう。自覚を持って古い伝統と社会観念に挑戦した呉敬梓の反逆精神は後世に深く尊ばれているのである。

## 注

- [1] 葉朗『中国小説美学』、北京大学出版社、1982
- [2] [3] [4] [7] [8] [9] [17] [19] [20] [22] 呉敬梓『儒林外史』（插图本）、齊魯書社、2002
- [5] 顧鳴塘『「儒林外史」与江南士紳生活』、商務印書館、2005
- [6] 范芩藥『帶棘玫瑰、一枝独秀：「儒林外史」中沈瓊枝人物形像分析』、『現代語文』、2007（1）
- [10] 孫希旦『礼記集解』、中華書局、1989
- [11] 霍松林『中国古典小説六大名著鑑賞辞典』、華岳文芸出版社、1998
- [12] 李漢秋輯校『儒林外史』（黄小田評点本）、黄山書社、1986
- [13] 毛沢東『在延安文芸座談会上的讲话』、『毛沢東選集』第二卷、人民出版社、1953
- [14] 陳慧蘭『婦女的希望之光——「儒林外史」中沈瓊枝的形像』、『中国婦女管理幹部学院学报』、1995（03）
- [15] エンゲルス『家庭・私有制和国家的起源』、『マルクス・エンゲルス全集』、人民出版社、1972
- [18] 瓦西列夫『情愛論』、三聯書店、1985
- [21] 呉敬梓・呉娘『呉敬梓・呉娘詩文合集』、黄山出版社、1993

（長江大学文学院講師）